

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007 ～ 2009

課題番号：19330080

研究課題名（和文） 戦略的協働を通じた価値創造モデルのダイナミズム

研究課題名（英文） Dynamism of Value Creation Models through Strategic Multi-sector Collaboration

研究代表者

平本 健太（HIRAMOTO KENTA）

北海道大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：00238388

研究成果の概要（和文）：本研究によって解明された戦略的協働を通じた価値創造は、21世紀の社会の課題に挑むための方法の1つである。この戦略的協働は、今日、世界中で急速に増加しつつあり、多元的な社会的価値の創造に対して大きな潜在力を秘めている。3年間の研究プロジェクトの結果、戦略的協働を通じた価値創造に関する7つの協働プロジェクトの詳細な事例研究を通じて、戦略的協働の本質が明らかにされた。われわれの研究成果は、18の命題として提示されている。これら18命題は、①参加者の特定化と協働の設定に関する命題、②アジェンダの設定を解決策の特定化に関する命題、③組織のやる気と活動に関する命題、④協働の決定・正当化と協働の展開に関する命題の4つに区分されて整理された。

本研究の意義は、大きく次の3点である。第1に、戦略的協働を通じた価値創造を分析するための理論的枠組である協働の窓モデルが導出された。第2に、戦略的協働を通じた価値創造の実態が正確に解明された。第3に、戦略的協働を通じた価値創造に関する実践的指針が提示された。

研究成果の概要（英文）：Value creation through strategic multi-sector collaboration which was resolved by our research project is one of the viable methods for the challenging solution of social issues in the twenty first century. Now rapidly wide spreading strategic multi-sector collaboration has great potential for pluralistic social value creation. In the result of three-year research project, we made seven in-depth case studies of pioneering strategic multi-sector collaborative projects and we presented the essence of value creation through the collaborations. Our conclusions are presented as 18 propositions. These 18 propositions are classified into four groups, which are propositions on 1) participants specification and “ba” setting, 2) agenda setting and solution specification, 3) willingness of organizations and activities and 4) coming down and development of the collaboration.

The significance of this research project is following. First, the framework the name of which is “collaborative windows model” for analyzing value creation through strategic multi-sector collaboration was developed. Second, the essence of strategic value creation through multi-sector collaboration was presented. Finally, practical implications for value creation through strategic multi-sector collaboration are presented.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	5,700,000	1,710,000	7,410,000
2008年度	5,700,000	1,710,000	7,410,000
2009年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
年度			
年度			
総計	14,800,000	4,440,000	19,240,000

研究分野：経営学

科研費の分科・細目：経営学

キーワード：戦略的協働，価値創造，協働の窓モデル，協働アクティビスト，意図せざる活動

1. 研究の概要

1-1. 研究の背景と目的

近年，NPO，政府，企業という3つの異なるセクターに属する組織間の協働の重要性がようやく認識されはじめた。しかし，一部の先駆的研究を除いて，NPO，政府，企業間の戦略的協働の解明は，非営利組織論，経営学，政治学等の研究分野において，ほとんど行われなかった。

われわれの研究の目的は，未解明でありながら，20世紀末から21世紀の世界において顕著になってきた重要な社会現象である戦略的協働を，理論的・実証的に解明し，戦略的協働に関する包括的・統合的な理論モデルの構築と戦略的協働に対する実践的指針を提示することである。

1-2. 戦略的協働の定義

参加者が自らの能力を超えた「新たな社会的価値の創造」に挑戦するには，さまざまな組織的プロセスが考えられる。1つの組織的プロセスは，同一セクターに属する組織が相互に関係を持つことはあっても，異なるセクターに属する参加者との関係を一切持たないまま，社会的価値の創造に挑戦するプロセスである。もう1つの組織的プロセスが，3つの異なるセクターに属する組織が完全に1つになった権限や能力を通じて，社会的価値の創造に挑戦するプロセスである。

本研究の分析対象である戦略的協働は，NPO，政府，企業という3つの異なるセクターに属する組織が，相互の種々の差違を理解しながらも，特定の課題の異なった側面に注目しつつ，協調してプロジェクトを形成し，実行する組織プロセスである。

したがって，われわれは，戦略的協働を「NPO，政府，企業という3つの異なるセクターに属する参加者が，単一もしくは2つのセクターの参加者だけでは生み出すことが不可能な新しい概念や方法を生成・実行することで，多元的な社会的価値を創造するプロセス」と定義する。なお，戦略的協働の「参加者」とは，NPO，政府，企業等の「組織」と協働アクティビストを含む「個人」である。

2. 7つの協働プロジェクト

本研究の分析対象である協働プロジェクトは，全部で7つである。以下，簡単に説明する。

第1の協働プロジェクトである「北海道NPOバンク」は，NPOを対象に融資を行うNPO法人として全国で初めて設立された協働プロジェクトである。第2の協働プロジェクトである「ジャパン・プラットフォーム（JPF）」は，自然災害や戦争等の緊急時にNGOに対して資金・資材を提供する国際人道支援の協働プロジェクトである。

第3は，「霧多布湿原トラスト」である。この「霧多布湿原トラスト」は，国内3番目の広さをもつ北海道浜中町の霧多布湿原の保全活動を展開している協働プロジェクトである。

第4は，「パシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）」である。このPMFは，若手音楽家の育成を目的として，毎年夏に札幌で行われる国際教育音楽祭を開催している協働プロジェクトである。

第5の協働プロジェクトは，「グリーンフ

リーズ・キャンペーン (GFC)」である。この GFC は、わが国でノンフロン家庭用冷蔵庫の開発・製品化を実現した協働プロジェクトである。第6の協働プロジェクトである「人道目的の地雷除去支援の会 (JAHDHS)」は、カンボジアやタイの地下に敷設された無数の地雷の除去に精力的に取り組んだことで著名である。第7の「北海道グリーンファンド」は、日本で最初の市民出資による発電用風車を建設・運用している協働プロジェクトである。

以上の7つの協働はいずれも、それぞれの課題領域において、新たな社会的価値の創造に向けて、わが国で最初に挑戦し、成功したプロジェクトである。

3. 研究の方法

本研究で採用される方法論は、事例研究である。事例研究は、特定の現象が「なぜ」そして「どのように」して生じるのかを問うための研究方法である。その特徴は、分析対象となる事例を、きわめて詳細 (in depth) に考察することが可能な点にある。

研究に際しては、われわれが演繹的に導出した「協働の窓モデル」(下図)にもとづいて事例分析のためのデータが収集・記述される。同時に、これらデータは、時系列分析の特殊形である「年代記分析」によって解析さ

れた。

4. 本研究の成果

具体的には、本研究では、7つの協働プロジェクトの全期間をそれぞれ4期に区分し、各期における多くの異なったタイプの変数、すなわち「協働プロジェクトにおける参加者の行動とその相互関係」がきわめて詳細に分析された。こうして記述・分析された研究結果は、以下の計18の命題として要約された。

1) 参加者の特定化に関する命題

命題1: 協働には、継続的な参加者と一時的な参加者が混在する。

命題2: 協働の捉え方は参加者によって異なる。

命題3: 参加者間には資源の相互補完性がある。

2) アジェンダの設定に関する命題

命題4: 協働アクティビストが、複数の重層的に連結された場を設定・活用する場合、協働の実現可能性が高まる。

命題5: 社会・政治・経済環境が変化する場合、協働の契機となる問題が認識・定義される。

命題6: 協働アクティビストは、具体的問題を含むアジェンダを設定する。

命題7: 協働アクティビストが、アジェ

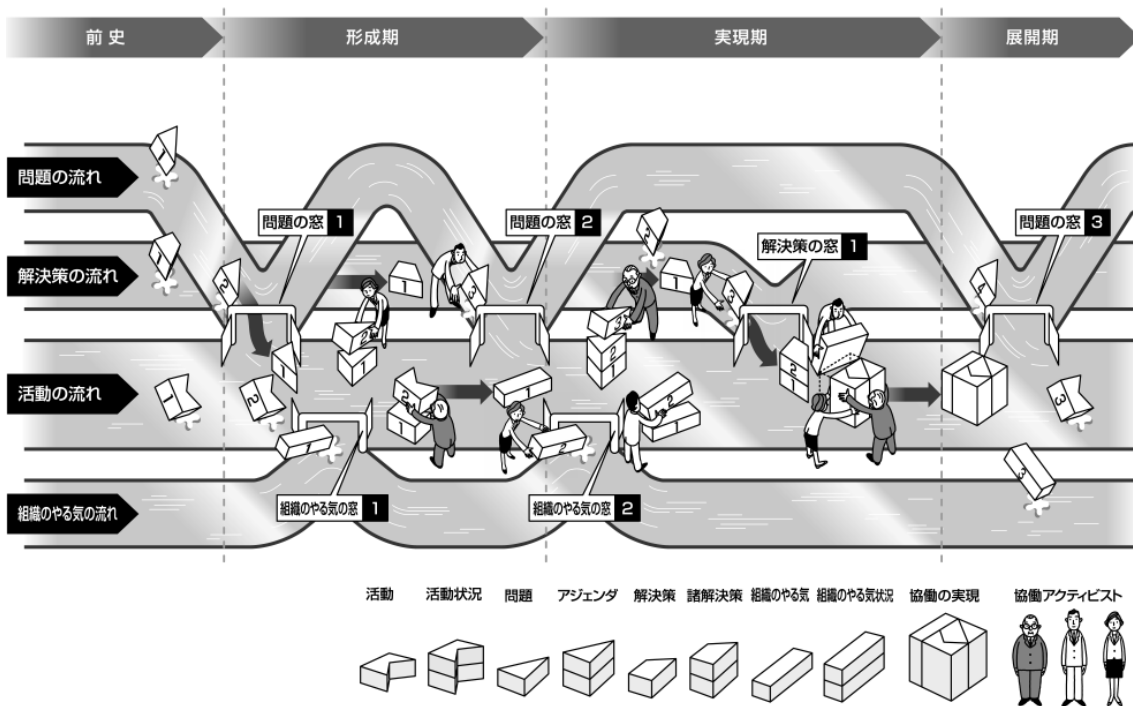


図 協働の窓モデルの概念図

ンダを参加者に認識させる場合、協働の実現可能性が高まる。

命題 8：参加者の信念や思いを具現する解決策が生成・特定化される場合、協働の実現可能性が高まる。

命題 9：(1) 技術的実行可能性が高く、(2) コストが許容範囲内に収まり、(3) 一般市民の黙認が得られる解決策が生成・特定化される場合、協働の実現可能性が高まる。

命題 10：協働アクティビストが、解決策を洗練する場合、協働の実現可能性が高まる。

3) 組織のやる気の生成に関する命題

命題 11：協働への社会的注目度が大きくなる場合、組織のやる気は高まる。

命題 12：協働の危機を乗り越えようとする場合、組織のやる気は高まる。

命題 13：新たなプログラムを開始しようとする場合、組織のやる気は高まる。

4) 活動と協働の決定・正当化に関する命題

命題 14：協働アクティビストが、(1) 協働を意図した活動と、(2) 協働を必ずしも意図しない偶然生じた活動とを 1 つに結びつける場合、協働の実現可能性が高まる。

命題 15：3 種類の協働の窓が、ほぼ同時に開く場合、協働の実現可能性が高まる。

命題 16：協働アクティビストが、アジェンダ、諸解決策、組織のやる気状況、活動状況の完全なパッケージを構成する場合、協働が実現される。

命題 17：協働の進展とともに、ガバナンスが形成される。

命題 18：協働の先例は、同一の領域内および他の領域に波及する。

5. 本研究の意義

本研究の第 1 の意義は、協働の窓モデルを導出した点である。協働の窓モデルは、協働のプロセスを効率的であると同時に「社会に広く開かれた」プロセスにするための、種々の手掛かりを提供する理論的枠組である。

本研究の第 2 の意義は、協働の窓モデルにもとづいて、協働の実態を正確に記述・整理し解明した点である。先行研究はごく限られていた。しかもそのほとんどの研究は、特定の明確な概念と理論的枠組にもとづいておらず、協働に関する理論構築を目指した研究ではなかった。特定の理論的枠組にもとづいた研究も少数は存在した。しかしながら、それらは協働のプロセスを分析するのに必ずしも適合的でない理論的枠組に依拠していた。本研究は、これら先行研究の欠点を克服し、明確な概念と理論的枠組にもとづいた事

例研究によって、複雑な現象を解明できたと考えている。

以上のように、本研究は、①モデルの導出と②実態の解明という 2 つの貢献を果たしたといえる。

6. 主たる発表論文等

[雑誌論文] (計 10 件)

- ① 平本健太「戦略的協働の本質」『経済学研究 (北海道大学)』, 59 (3), 2009 年, 137-168 (査読無)
- ② 岩田智・時鍵「日本企業の中国における研究開発のグローバル化 一日産自動車の事例一」『経済学研究 (北海道大学)』, 59 (3), 2009 年, 99-116 (査読無)
- ③ 岡田美弥子「マンガビジネスにおける分析視角の検討」『経済学研究 (北海道大学)』, 59 (3), 2009 年, 169-178 (査読無)
- ④ 谷口勇仁「雪印乳業集団食中毒事件に関する事例研究の整理と検討」『経済学研究 (北海道大学)』, 59 (3), 2009 年, 199-188 (査読無)
- ⑤ 坂川裕司「チェーンストアにおけるサプライチェーンの動態」『経済学研究 (北海道大学)』, 59 (3), 2009 年, 189-198 (査読無)
- ⑥ 宇田忠司「フリーランスの言説スペクトル 一英雄・騎士・従僕一」『経済学研究 (北海道大学)』, 59 (3), 2009 年, 215-224 (査読無)
- ⑦ 平本健太・大原昌明, 小島廣光他「NPO, 政府, 企業間の戦略的協働-黒松内ぶなの森自然学校-」『経済学研究 (北海道大学)』, 59 (1), 2009 年, 19-54 (査読無)
- ⑧ 小島廣光・平本健太「戦略的協働とは何か」『経済学研究 (北海道大学)』, 58 (4), 2009 年, 155-194 (査読無)
- ⑨ 谷口勇仁「企業事故研究におけるヒューマンエラー研究の構図と課題」『経済学研究 (北海道大学)』, 58 (4), 2009 年, 261-270 (査読無)
- ⑩ 坂川裕司「小売フォーマット概念の再検討」『経済学研究 (北海道大学)』, 58 (4), 2009 年, 271-288 (査読無)

[学会発表] (計 8 件)

- ① 平本健太「戦略的協働の本質-HGF の事例研究-」, 日本生産管理学会第 31 回全国大会, 2010 年 3 月 15 日, 北海道大学.

- ② 小島廣光「組織現象の実証研究-営利, 非営利, そして協働」(招待講演), 日本生産管理学会第 31 回全国大会, 2010 年 3 月 15 日, 北海道大学.
- ③ 坂川裕司「SCM ベースの小売業態革新」, 日本生産管理学会第 31 回全国大会, 2010 年 3 月 15 日, 北海道大学.
- ④ 相原基大「NPO・政府・企業間の協働過程におけるアクターの相互作用」, 日本生産管理学会第 31 回全国大会 2010 年 3 月 15 日, 北海道大学.
- ⑤ 谷口勇仁「企業事故研究の構図と課題」, 日本生産管理学会第 31 回全国大会, 2010 年 3 月 15 日, 北海道大学.
- ⑥ 岩田智「中国における日系企業のイノベーション管理」, 日本生産管理学会第 31 回全国大会, 2010 年 3 月 15 日, 北海道大学.
- ⑦ 岡田美弥子「マンガビジネスの分析視角—ドラえもん と ポケモンの ビジネス システム」, 日本生産管理学会第 31 回全国大会, 2010 年 3 月 15 日, 北海道大学.
- ⑧ 宇田忠司「コンテンツ産業の現状と課題」, 日本生産管理学会第 31 回全国大会, 2010 年 3 月 15 日, 北海道大学.

[図書] (計 1 件)

- ① 小島廣光・平本健太 (編著)『戦略的協働の本質—NPO, 政府, 企業による価値創造』有斐閣, 2010 年 (近刊).

7. 研究組織

(1) 研究代表者

平本 健太 (HIRAMOTO KENTA)
北海道大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号: 00238388

(2) 研究分担者

小島 廣光 (KOJIMA HIROMITSU)
北海道大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号: 80093029
岩田 智 (IWATA SATOSHI)
北海道大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号: 00232679
谷口 勇仁 (TANIGUCHI EUGENE)
北海道大学・大学院経済学研究科・准教授
研究者番号: 60313970
岡田 美弥子 (OKADA MIYAKO)
北海道大学・大学院経済学研究科・准教授
研究者番号: 30333587
坂川 裕司 (SAKAGAWA YUUJI)
北海道大学・大学院経済学研究科・准教授
研究者番号: 40301965
相原 基大 (AIHARA MOTOHIRO)

北海道大学・大学院経済学研究科・准教授
研究者番号: 40336144

宇田 忠司 (UDA TADASHI)
北海道大学・大学院経済学研究科・准教授
研究者番号: 80431378

横山 恵子 (YOKOYAMA KEIKO)
東海大学・政治経済学部・准教授
研究者番号: 00349325

(3) 連携研究者 なし